

## 古典教材『おくのほそ道』の言葉をたずねる

—発句「草の戸も住替る代ぞ雛の家」を中心に—

仁野平 智明

### はじめに

『おくのほそ道』は、中学校・高校ともに教科書教材として頻繁に取り扱われる。教材化にあたっては、テキストの一部を教材文として抄出する形式が採られる。①『おくのほそ道』全編の教材化はなされえないという学習カリキュラム上の都合をもとに、『おくのほそ道』は、学習者が対峙する「教材文テキスト」と、学習者があずかり知らない「教材文テキスト外テキスト」にそのつと分断される。教材研究の過程で、授業者は、学習者の視点の保護を前提とし、一部分に切り離されたテキストを教材化するために不可欠な、テキストすべてを俯瞰する授業者としての視点の形成を求められる。それは決して、「教材文テキスト外から得た情報を授業に持ち込み、謎解きをしてみせるためではなく、『おくのほそ道』の全テキストの教材研究を通じ、「教材文テキスト」のみを「読む」ことを円滑化する知見を養うためでなければならぬ。

本稿は、『おくのほそ道』冒頭部分の授業構想②のための教材研究の一端を示すことを目的とする。国語科における「読む」ことの教材として研究するにあたり、『おくのほそ道』を語り手である「予」③が語る虚構世界として捉え、テキスト内で完結するものとみなす。『おくのほそ道』の中で「予」によって語られた言葉のみを「読む」ことの拠りどころとし、作者を同じくする別テキストや、作者のコメント等を材料としない。言うまでもなく、『おくのほそ道』で語られた世界に触れようとするとき、我々は、先賢である文学研究者の学恩の重きを負わずにはいられない。ここに拝謝するとともに、本稿における分析方法および分析結果が必ずしも文学研究のそれと一致しないことを申し添える。

なお、本稿は、『新編日本古典文学全集』を出典とし④、本文の引用部分を〔 〕内に示す。「草の戸も住替る代ぞ雛の家」の句の分析を契機とし、『おくのほそ道』の全テキストの言葉をたずねる試みである。

### 1. 「雛の家」——「実見」か、「想像」か

発句「草の戸も住替る代ぞ雛の家」の構造の考察に先立ち、「雛の家」は「予」が実際に目にしたもののなか、それとも、「予」が思い浮かべたもののなか、すなわち、「実見」か、「想像」かに

ついて措定する必要がある。

「実見である場合」「予」の行動には、「住る方は人に譲りて、杉風が別墅に移ったのち、もとの住まいを改めて訪ねる」というイベントが挿し込まれることになる。詠句の契機は、かつての草庵としての自らの住まいが様変わりした事実を、「雛の家」の目撃によって実感して得た感慨にある。眼前に立ち現れた「雛の家」の示唆を受けて、初めて生まれた「草の戸も住替る代ぞ」という知覚を、「雛の家」を修飾するものとして添えたことになる。この場合、「雛の家」との邂逅なくして、「草の戸も住替る代ぞ」の知覚は生じえない。

いっぽう、「想像」である場合、「草の戸も住替る代ぞ」の知覚が詠句の契機となる。その知覚から派生して、あるじが「住替る代」を迎えた結果、「草の戸」はどのような変貌を遂げるのか想像してみる。そこに感慨を呼ぶために最もふさわしいイメージを模索し、選ばれたのが「雛の家」であった、という成立過程である。

栗山理一は、発句の成立に関わる要素として、「場」の存在を掲げる。「作品の生まれる「場」とは、「一つの作品はいつの場合でも、ある特定の条件のもとに作られることを指し、「場」は「作者のその時における主体的条件」と「作者のその時における客体的条件」に分けられるが、それらはいずれも、「その時における歴史的場」ということにな」⑤。栗山は、「多かれ少なかれ句の生まれた時の主体や客体的条件を示してくれるもの」として「前書」を挙げ、「句に前書が必要と感じられるのは、その句の正しい享受のためには前書に指示された「場」を理解することを要求している」とし、「前書なしには誤解を招くか、あるいは不十分な享受に終わることへの虞れを作者が感じているからに外ならない」⑥とする。

『おくのほそ道』は、散文に韻文を挿し挟む形式をもって語られる。韻文をとりまく散文は「前書」とみなし、「紀行などでは前文を前提として発句を解しようとする」⑦のであるならば、「草の戸も」の句の前後に、「場のヒントとなる何か」が語られているかもしれない。

「作者のその時における客体的条件」とは、「いづつ、いづつ、いづつ、何をも含めて」⑧のもとに作品が生まれたか、あるいは詩的体験が得られたかということ⑧を意味する。そこで、客体的条件を句の前後の語りから整理する。

「草の戸も」の句は、「住る方は人に譲りて、杉風が別墅に移る」と「面八句を庵の柱に懸置」の間に提示される。「住る方」を「譲った」人の存在は示されているが、「実見の場合の条件としての「いつ」(住る方)を退去したのち「いづつ」(いつ)かいつの「住る方」で「いづつ」(いつ)住る方」を「譲」った「人」の元への訪問「何」を「雛」(い)を示す情報はいずれも含まれていない。いっぽう、「想像」の場合の条件としての「いつ」「いづつ」は、「面八句を庵の柱に懸置」の一文のうち、「庵」の一語から推定できる。『日本国語大辞典』⑨によれば、「草の戸」と「庵」は同義であることから、「庵」もまた「予」自らの住まいの呼称であるとみなすことができる。すなわち、「面八句を庵の柱に懸置」時点で、「予」はまた、自らの住まいにいたこととなる。

「やういふ情況」もまた、「面八句を庵の柱に懸置」といふ行為から推定できる。「面八句」とは、「百韻連句の懐紙の初折に記す八句目まで」（『日本国語大辞典』）であり、それを「庵の柱に懸置」とは、「草の戸も」の句を発句とする連句を書き記した懐紙を、自らの住まいの柱に懸けておくといふ行為を意味する。同じく句を書きつけた紙を柱に懸けるという行為を、「予」はそのうち、「雲岸寺のおくに仏頂和尚山居の跡」を訪ねた際にも行っている。

「彼跡は」の程にやと後の山によちのほれば、石上の小庵、岩窟にむすびかけたり。妙禪寺の死関、法雲法師の石室を見るがごとし。木啄も庵はやぶらず夏木立と、とりあへぬ一句柱に残侍し」

（の場面での「場」の「客体的条件」における「やういふ情況」とは、「仏頂和尚山居の跡」を訪ね、「山によちのほ」って辿り着いたところ、目の当たりにした「岩窟にむすびかけた」「石上の小庵」の姿は「妙禪寺の死関」や「法雲法師の石室」を彷彿とさせた、その感慨を、その場で句に詠み、紙に書きつけて、「仏頂和尚山居の跡」の柱に残した、という即興の趣向を意味する。この訪問譚が「木啄も庵はやぶらず」といふ知覚に収斂されるまでの過程として、かつて「仏頂和尚」から取横の五尺にたらぬ草の庵、むすぶもくやし雨なかりせばと松の炭して岩に書付侍り」と伝え聞いた「山居」のイメージが、ようやく辿り着いた「石上の小庵」の実景と重なり、さらに、「妙禪寺の死関」や「法雲法師の石室」を想起させ、「予」にとつての「庵」のイメージが重層性を備えたことに端を発し、次に、「仏頂和尚山居の跡」の存在を知ってから、実際に尋ねあてるまでの時間の経過に思いを馳せ、自らが訪問するまづその姿をとどめていたことへの感慨に発展し、「庵」を破壊する一因としてのキツツキの存在に思い至り、そのキツツキが棲み暮らすような木立の中にありながら、今日まで破壊を免れたことに、「仏頂和尚山居の跡」の尊厳を見出した、という流れが推測される。

そこには、「作者の思想・感情などの心理的要素」とも、「年齢・健康・生理などの肉体的要素」も含まれてくる。さらには文学創造の特性として、その現在時における諸条件のみならず、時間・空間を超えた精神的な意識も加わってこよう。つまり、その時处における作者の実体験によって生じた主体的要素だけではなく、過去の体験内容がこの時喚起されて、これに交わっていることもある」といふ「場」の「主体的条件」もも反映している。

「木啄も庵はやぶらず夏木立」の句を紙に書きつけて物質化し、「柱に残したのは、「予」の訪問の記念であるとともに、困難に耐えた「山居の跡」を顕彰する意図にもとづくものである。とくに「やぶ」わけていてもおかしくなかった「庵」が、今もなお、この厳しい自然の中で朽ちずに存在していた。その事実を自らの目で確かめた感動は、耐え抜いた「庵」への賛辞へと昇華する。「庵」を讀み、顕彰するために「やぶ」わしい手段として、「予」は発句を詠み、紙に書きつけ、柱に掲げる。柱は、建造物を支える主要部材であり、その内部に抱かれて恩恵を受ける人間にとって、自らの抛りこころを象徴する存在でもある。柱に句を懸ける行為は、句に詠むことで結晶化させた最上の賛辞を建造物に捧げることを意味する。

そこで、「とりあへぬ一句柱に残侍し」と「面八句を庵の柱に懸置」とを比べ見ると、「草の戸」の柱に連句を書き記した紙を「懸置」いた行為もまた、「草の戸」への惜別の辞としての句を捧げ、自らの暮らしを支えてきた「草の戸」を顕彰する別れのセレモニーであったとみなすことができよう。その「場」には、確かに、「草の戸も住替る代」といふ知覚を動機とする「主体的条件」があった。「雛の家」は「想像」裡にあるモチーフであると捉えるほうが、より自然ではないだろうか。

## 2. イホリとイハ —— 住み手が替われば、呼び名が変わる

### 二物の照応

「雛の家」が想像であるとするれば、「草の戸も住替る代」も雛の家」の句の構造は、次のように分析される。

A 「草の戸」 → 変容 → B 「雛の家」

この構造を句意に反映させると、以下のようなことになる。

A 「草の戸」も（あるじが）「住替る代」（を迎える）ぞ。

A 「草の戸」は B 「雛の家」に変わるかもしれない。

「草の戸も住替る代」といふ発見に対して、その結果、どのような変容をもたらすことになるか、一例を想像する。「雛の家」が「想像」裡の所産であり、「草の戸も住替る代」を本意とする句であるとするならば、「雛の家」は「草の戸」との取合せのために選ばれたことになる。栗山は、発句の方法として、「取合せ」と「物仕立」を挙げている<sup>1)</sup>。

もとり取合せによる方法も、対象の本情を捉え、表出するためのものである。そして、対象をそのものとして直叙することなく、他の物を借り、それとの照応において対象の真を写すという方法を選んだことは、物を物象連関の姿において把握することに外ならない。対象としての物はただそれだけが孤立して存在するものではなく、つねに他との連関において存在するものとするれば、「二物の照応」によってその実在感を確かめ、あるいは実在の細帯を明らかにすることにもなる。このような方法を選んだことは、豊かな想像力に依存するということもあるが、一つには詩的表現の媒材となる言語が不完全なためでもある。言語は、音楽における楽音や絵画における色や線のように抽象されたものとしての純粹な対応物を持ち得ない。音と意味との完全な協和としての純粹言語は存在したがたく、たえず誤解や不確定な言語表象を伴ってくる。したがって、詩的表現はそれ自体としては過不足のない伝達を保証することは困難なために、想像力の助けをかりて表現効果の確率を高めようとする。取合せも、いわば想像力に補償を求める俳諧固有の方法と考えることもできよう。

さらに、「二物の照応」の効果について、それを「曲輪の内」に求める、すなわち、「慣習や月並みにする」<sup>2)</sup>ののではなく、「曲輪の外に求められる場合は、その照応には非連続の飛躍が

あり、遠く離れた物と物との連結として、想像力の補償を要求し、難解を伴うことにもなる。それだけに結合が完了すれば、その照応はダイナミックになり、強い迫力やいきいきとした実在感を喚起することになる。「予」のであるならば、「草の戸」との「物家連関の姿」が、「その実在感を確かめ、実在の紐帯を明らかにする」ためには、A「草の戸」と取合せられる対象はA「草の戸」ではなくB「離の家」を内在するBを理想とすることになる。「離の家」がA「草の戸」ではなくB「離の家」が、変容を経てもなお、同一の建造物であり続けるところにある。替わるのは居住者であり、その変化が建造物の呼称の転換を生む。物理的な存在としての建造物は何ら変わることなく、呼称だけが、居住者が建造物に求める意義を反映する。それではA「草の戸」とB「離の家」との呼称には、いかなる「非連続の飛躍」が求められるのだろうか。

【予】におけるイホリとイヘ

「草の戸」は「庵」と同趣であり、建造物の名称としてのイホリの一種として認められる。それに対して、「離の家」は建造物の名称としてのイヘに「離の」の修飾句を付加したものとみなされる。「草の戸」と「離の家」との呼称に託されたイメーシの考察に先立ち、それぞれの語の背景となるイホリとイヘを含む語の全用例を『おくのほそ道』より収集し、「予」におけるイホリ観と「イヘ観」について検証する。

『おくのほそ道』におけるイホリ関連語群およびイヘ関連語群の全用例を、【図表1】『おくのほそ道』におけるイホリ関連語群、【図表2】『おくのほそ道』におけるイヘ関連語群として掲示する。【図表1】のイホリ関連語は、総数12語あり、イホリ、イホがそれぞれ2例あるため、全10種(庵(イホリ)、(庵(イホ)、(草の戸)、(旧庵)、(小庵)、(草庵)、(山居)、(石室)、(別室)、(別墅)となる。【図表2】のイヘ関連語は、総数18語あり、イヘが7例、コイヘが3例、「タク」が2例あるため、全9種(家(イヘ)、(小家(コイヘ)、(家(ヤ)、(宅)、(人家)、(貧家)、(一家)、(空屋)、(空(ぶき))となる。

なお、イホリ関連語群のうち、「庵」の字を含まない「山居」、「石室」、「別室」、「別墅」については、「山居」と「石室」は同じ建造物を指す語として「庵」が用いられていること、「別室」は『日本国語大辞典』の「室」の語義に(1)建造物の内で定まった人の用にあててる区画。また、小さな庵。室の間。「とあること、「別墅」は『日本国語大辞典』の語義に「墅」は、田野の中の仮廬の意とあることから、それぞれ、イホリ関連語とみなす。同じく、イヘ関連語群のうち、「家」の字を含まない「宅」、「空屋」、「空(ぶき)」については、それぞれ『日本国語大辞典』の語義に「宅」は(1)住む家。住まい。住みか。居宅。住居。「空屋」は「空(ぶき)を葺いた家」とあること、「空(ぶき)は、その「空屋」の「葺き」屋根のみを用いて「屋」を省いたものと考えられることから、それぞれ、イヘ関連語とみなす。

また、「豎横の五尺にたらぬ草の庵 むすぶもへやし雨なかりせば」の歌中の「草の庵」と、

「蟹の家や戸板を敷て夕すゞみ」の句中の「蟹の家」は、ともにその作者が「仏頂和尚」と「美濃国商人低耳」であり、「予」ではないため、「予」の語りにおける「テキスト内別テキスト」の語となるが、『おくのほそ道』の全テキストを「予」の語りによる虚構世界とみなす観点から、「テキスト内別テキスト」もまた、「予」の語りの一部として、「予」による住まいの呼称の一群に含めるものとする。加えて、「破屋」については、住居となるべき建造物ではあるものの、「去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣をほらひて」の時点では、住み手が誰もいなかったことから、イホリにもイヘにも含まない。

これらのイホリ関連語群およびイヘ関連語群の全用例における最も顕著な特徴は、住み手を同じくする建造物の呼称が複数ある場合、イホリ関連語とイヘ関連語は決して混在しない、という点である。「予」は自らの住まいをイホリ関連語で呼び、イヘ関連語は用いない。「仏頂和尚」の住まいの場合も同じである。翻るに、「桃翠」と「等哉」ともに人名であるが、彼らの住まいをイヘ関連語で呼び、イホリ関連語は用いない。住み手の職業の特徴別にみると、僧はイホリに住み、農夫・漁夫はイヘに住む。個人名を明記する住み手は、いずれもイヘに住む。このようなイホリとイヘの呼称の使い分けは、「予」における「イホリ観」と「イヘ観」が、住み手のライフスタイルに基づくことを意味している。

杉風	不明	世をいとふ人	僧					予			住み手	
			雲居禅師	法雲法師	仏頂和尚			旧庵	庵	草の戸		
					庵	小庵	山居					
別墅	草庵	庵	別室	石室	庵	庵	山居	旧庵	庵	草の戸	呼称	用例
杉風が別墅に移るに	ある草庵にいざなはれて	落ぼ・松笠など打煙たる草の庵閑に住なし	雲居禅師の別室の跡、坐禅石など有	法雲法師の石室を見るがごとし	木啄も庵はやぶらず夏木立	石上の小庵、岩窟にむすびかけたり	堅横の五尺にたらぬ草の庵	旧庵をわかるゝ時	面八句を庵の柱に懸置	草の戸も住替る代ぞ離の家		

【図表1】『おくのほそ道』におけるイホリ関連語群

「松嶋の月先心にかゝりて、住る方は人に譲」ることを決めた「予」は、のちに、「松嶋の月」をこのように見た。  
 「雄嶋が磯は地つききて、海に成出たる嶋也。雲居禪師の別室の跡、坐禪石など有。将松の木陰に世をいとふ人も稀く見え侍りて、落ば、松笠など打煙たる草の庵閑に住なし、いかなる人とハしられずながら、先なつかしく立寄ほどに、月海に移りて」  
 「世をいとふ人」が「草の庵閑に住なし」ている光景を目にし、「先なつかしく立寄」っているうちに、いつしか月は海の上に映じる。何にもまして憧れた「松嶋の月」は、隠棲との取合せを

不明	不明	不明	農夫・漁夫					知人							住み手	呼称	用例
			漁夫	漁夫	漁夫	漁夫	港付近の住人	農夫と家族	女行	等裁	長山氏重行	封人	等窮	桃翠			
一家	まどしき小家	あやしき貧家	蛭の小家	蛭の家	蛭の笛ぶき	蛭の笛屋	人家	農夫の家	女行の家	その家	あやしの小家	ものゝふの家	封人の家	等窮が宅	桃翠宅	雛の家	草の戸も住替る代ぞ雛の家
一家に遊女も寐たり萩と月	漸まどしき小家に一夜を明して	菫を敷てあやしき貧家也	浜はわづかなる蛭の小家にて	蛭の家や戸板を敷て夕すゞみ	蛭の笛ぶきかすかなれバ	蛭の笛屋に膝をいれて	人家地をあらそひて	農夫の家に一夜をかりて	女行が家に入集る	その家に二夜とまりて	あやしの小家に夕顔・へちまのはえかゝりて	長山氏重行と云ものゝふの家にむかへられて	封人の家を見かけて舎りを求ム	等窮が宅を出て五里計	暮れバ桃翠宅に帰る	自の家にも伴ひて	

【図表2】『おくのほそ道』におけるイへ関連語群

もって語られる。「仏頂和尚の山居へも、「山によちのぼ」ってまで訪ね、「妙禪寺の死関」や「法雲法師の石室」のイホリのイメージをも重ね合せながら、顕彰の発句を贈る。イホリでの隠棲は、「予」の憧憬の対象であったことが伺える。自らの住まいをイホリ関連語で呼ぶのは、「予」が隠者としてのアイデンティティを強く意識していたからにほかならない。

いっぽう、「予」がその住まいをイへ関連語で呼ぶのは、いずれも、市井の暮らしを送る人々である。知人たちも、農夫・漁夫たちも、みな、家庭をもち、肩を寄せ合って俗世に暮らしている。「予」は福井を訪れた際に、ある古い知人の元を訪ねる。「等裁」という名のその男は、「爰に等裁と云古き隠士有」、すなわち隠者として紹介されるにもかかわらず、その住まいは「あやしの小家」、「その家」と呼ばれ、イホリとは決してみなされなない。それは、「予」が「門を叩は、侘しげなる女の出で」、「かれが妻なるべし」といられたからである。妻と同居する男の住まいは、「予」にとって、イへ以外の何ものでもなかった。

上記の通り、『おくのほそ道』におけるイホリ関連語群およびイへ関連語群の全用例の検討の結果、住み手のライフスタイルに応じた、イホリ関連語とイへ関連語の厳密な使い分けに加え、イホリとイへを、「一人」と「複数人」、「独り暮らし」と「家族同居」、「遁世」と「世俗」などの、対立構造のもとに捉える「予」の言語感覚が見出された。

### イホリとイへの原義

このような「予」におけるイホリとイへの定義は、『日本国語大辞典』における語義とも一致する。「予」のイホリ観は、同辞書による見出し語「いほり」【庵菴・廬】の語義のうち、「一」草や木で屋根や壁を造った、小さな、粗末な仮小屋。いほ。「二」(八)隠者、僧などの住む粗末な仮の家。あん。「に該当する。同見出し語「いほり」の語誌欄は、以下のとおりである。

(1)「いほ」の動詞形「いほる」が名詞化したもの。万葉歌では、「いほ」の「いほ作」という言い方に對し、イホリは通常「いほりす」とのみ言われることも、イホリに本来「いほ」を設置する「意」が含まれていたからであらう。

(2)平安時代以降は「いほ」イホリは同意語となつて、和歌や修辭的文章では音調の都合によつて使い分けられるが、一般の散文ではイホリが次第に優勢となる。中近世では、小さな草の家や僧侶の草庵の実質的な意味を失つて、雅語的・比喩的に使われることが多い。

また、「仏頂和尚山居の跡」の呼称の一種である「イホ」は、同辞書の見出し語「いほ」【庵・菴・廬】によると、以下のとおりとなる。

(1)草不で造つた粗末な家。仮屋。農事のための仮小屋。  
 (2)自分の家を謙遜していう語。いほり。  
 同見出し語「いほ」の「語誌」欄は、以下のとおりである。

(1)意味的にも音韻的にも関連の強いイへと同源と見られる。イへから「いほ」が派生したとの見方もあるが、「いほ」は、家屋形態に主眼があり、それもより原始的なものと思われる。

(2)「いほ」イホリは、漢字「庵」廬の訓に当てられ、漢文学でのこれらの字の用法に添って、隠遁者の住居も意味するようになった。

上記の語義および語誌を鑑みるに、イホリは、「いほ」の動詞形「いほる」が名詞化したものとして、「いほ」よりも後に生まれ、「平安時代以降は「いほ」イホリは同意語となって、和歌や修辭的文章では音調の都合によって使い分けられるようになったものであり、イホが「隠遁者の住居も意味するようになった」ことには、「漢字」庵「廬」の訓に当てられ、漢文学でのこれらの字の用法に添った結果であるという、イホリとイホの相関性が推定される。この点において「おくのほそ道」の「豎横の五尺にたらぬ草の庵 むすぶもくやし雨なかりせば」の歌と、「木啄も庵はやぶらす夏木立の句におけるイホも、「隠遁者の住居も意味するようになった」用法であり、「音調の都合によって使い分けられ」たものとみなされる。

「いほ」は、「いほ」の語義のうち、「予」のイへ観は、「一」の「(1)と」(3)に該当する。

(1)人々が寝起きして生活を営んでいるところ。家族などが住んでいるところ。家屋敷、土地などを含んだ空間全体。また、特に自分の住まいとするところ。わが家。

(3) (1)の中で、人が住むために作った建物のみを指す。家屋、屋。

上記の「いほ」の語義において、同辞書による「いおり」「および」「お」の語義との根本的な違いは、住み手が「人々」や「家族」という複数人にわたる点である。上記の「いほ」の語義のうち、「一」の「(2)」では、「(1)に住んでいる人々。家族。家人。また、自分を含めた一家。家庭。」を指す。イホリおよびイホの住み手は隠者や僧であり、独り暮らしを前提とするが、イへは家族のための住まいであり、家族そのものさえも意味する。隠者や僧も、初めは何らかのイへに生まれた。しかし、イホリ暮らしを選び取るために、やがてイへを捨てる。隠者や僧の志向から、そのようなイへとイホリの関係性が見えてくる。「予」における「草の戸」と「家は、孤独と家族、静けさと賑わい、閑散と繁忙、清澄と混沌、などの互いに相反するイメージを内包している。自らが「草の戸」と呼んでいた住まいが、住み手が替わることによって「家」に変容する。「家」を逃れ、「庵」を求めた末に行き着いた「草の戸」は、人に譲ればたちまち、世俗へと還り、「家」と化す。「草の戸」の取合せとしての「家」には、同一の建造物であるからこそ、「非連続の飛躍」がある。それは、イホリとイへの属性の対称のみならず、希求したイホリが棄捨したはずのイへへと変容するという、因果の逆転でもあった。「予」はいたづらにその変容を嘆くのではなく、「草の戸も住替る代ぞ」の発見を発句に結晶化させることによって、私的経験を契機に得た諦観を詩に転じたのである。

### 3. 「雛」—— 暗示を読み解く

「草」の「(1)」「(2)」「(3)」の「雛」の「(1)」「(2)」「(3)」の「家」

「草の戸」と「家」の底流には、イホリとイへのイメージがある。それでは、「草の戸」と「雛の家」には、どのようなイメージの照応が託されているのだろうか。

『日本国語大辞典』は、「くきの戸」の補注として、「平安中期より用いられていた「草のくき」をもとに寂蓮が使はじめたものか。」とし、「寂蓮集」11822~12022頃「卯の花の垣根ばかりはくれやらで草の戸をくきぬ玉河の里」「新撰菟玖波集」1495「秋上夕つゆに花々草の戸をくきで 小萩うつろひをしかなく道宗伊」を用例に挙げている。この2首の例を鑑みるに、「草のくき」と「トザシ」を、名詞のトと動詞のサスに分解し、「戸」を鎖す(同辞書による見出し語「くき」の「(四)鎖」)「か」(門、戸口、錠、柱などをしめる。また、店などを閉める。「ト」としてトを目的語化することにより、クサノトという造語が生み出されたという推測が可能になる。同辞書によれば、「くきの戸」の類語に「草のくき(見出し語「くきの戸」)と「草のくき(見出し語「くきの戸」の編戸)」がある。

同辞書の「くきの戸」の語義は、「(1)草が生い茂って、入口や道をとぎやしてしまつて。」と(2)草が生い茂って、出入口をとぎやしてしまつたようなきびしい家。また、そのような家の戸。」であり、補注には「語義について、歌学書には両様の注釈が施されている。「色葉和雜集」六は(1)の意で「まさしくとにせねども、ただ草のふかくしげりふさがりたるをいふにや」とあり、頭昭の「後拾遺抄注」は(2)の意で「草しげりたる門をば草の戸鎖なごよむなり」とあるとする。

「草の戸」が「草のくき」から派生した語であるとするならば、「草のくきの戸」転じて、粗末なわびしい住まい。「とぎやれる「草の戸」は、建築様式としての「草のくき」を指すだけでなく、「草が生い茂って、入口や道をとぎやしてしまつて」という自然現象に見舞われた建物とみなすこともできよう。「予」が自らの住まいの表現に「草の戸」の語を選んだのは、繁茂する草の勢いをそのままにする、自然まかせの暮らしぶりを、クリアなビジュアルとして展開する意図があったのではないか。クサノトの原義に加えて、「草」と「戸」を「(1)」によって媒介するクサノトは、「草の戸」の「草」の二音一字を単独で切り離して見せることによって、「草」のイメージをたちまち視覚的に喚起する。その「草」の「(1)」「(2)」「(3)」が、「雛」の「(1)」の「家」を呼び寄せる。

「草の戸」と同じく、「家」に対して「雛」の二音一字を「(1)」によって結びつける「雛の家」において、「草の戸」と「雛の家」との照応には、「草」のイメージと「雛」のイメージの照応が内在する。「草の戸」に表象される独り者のわびしさや、「雛の家」に表象される雛人形を飾る人々の華やかさとの照応に見られる陰と陽や、静と動というような表層における対比の奥には、自然物である「草」と人工物である「雛」のイメージが響いている。草や木は、天然自然の賜物である。かたや、「雛」と「雛」をとりまく事物は、人間の所産に満ちている。とりもなおさず、「雛」自身が、人のかたどった存在であった。人が、小さな人を複製し、小さな着物を着せ、小さな道具を与えて、人と同じ食べ物や飲み物をそなえる。人が人の営みをなぞることを楽しむ人形遊びの核となる「雛」のある「家」は、イへのなかでもとりわけ人間臭にあふれるものとして定

位される。「草」と「雛」との照応は、自然と人為という「非連続の飛躍」を秘めているのである。

### 【雛の家】の予感

「雛の家」は、「物を物象連関の姿において把握すること」「すなわち、「それとの照応において対象の真を写すという方法」のために、「草の戸」と取合せた「二物の照応」の片割れである。それでは、なぜ、「予」はその片割れにふさわしいものとして「雛の家」を選んだのだろうか。

「面八句を庵の柱に懸置」の直後、「予」は自らの出立の日付を、「弥生も末の七日」と語っている。この事実から、「草の戸」の句の詠まれた時点が、「やゝ年も暮」から「弥生も末の七日」まで、すなわち、年末から3月27日までの期間にあたることが分かる。「雛の家」という雛人形の飾られる光景の想像に結びつく上巳の節供は、この期間内に含まれている。そこで着目すべきは、「雛の家」が、住み手を象徴する呼称として「草の戸」と照応するという相互関係である。「草の戸」の住み手は、隠者を志向し、庵を結ぶ「予」である。それでは、「雛の家」の住み手は、何を志向する誰なのか。「予」は、次の住み手に「雛」を志向する要素を見出した。さらに、その住み手は「家」を形成する存在でもあった。「雛の世界を統べる唯一の存在、それは、「女の子」である。

「予」は、「住る方を人に譲る。その「人」は、「予」と社会的契約を取り交わす以上、成人した何者かであろう。しかし、その「人」は、「予」が「草の戸」の変容した姿を想像して名付けた呼称「雛の家」のあるじではない。「人に譲りて」という状況が生まれたとき、「予」は、次の住み手についての情報を得た。「予」の想像は、そこに起因する。次の住み手の中に、女の子が含まれることを知り、「予」は、女の子を住み手の代表として指定した。上巳の節供の雛遊びの主役となる資格は、女の子のみに与えられる。独りでは生きてゆけない女の子の周りには、保護する誰かが付き添う。そこに、イハが立ち現れる。「雛の家」のイメージは、「予」には必然であるだけでなく、もはや予感ですらあった。

「草の戸」の句の生まれる「場」として、「予」は旅支度の様子を通じて自らの生活を赤裸々に語る。「破れた（も）引、傷んだ（笠の緒）、（三里に灸）をすえねばならない脚。自身の身体も、それを覆う旅装束も衰え、しかも、それらを自ら繕うしかない独り身のわびしき。旅支度に次から次へと動んだのも、早手回しに「住る方を人に譲」ってしまったのも、すべては「そぞろがみ」や「道祖神」に取り憑かれてしまったせいだ、という情けなき。自らの様子を矢継ぎ早に語るコメディタッチのリズムを、ペーソスが包みこむ。「月日は百代の過客にして」と語り始めた旅の哲学の深遠さや荘重な語り口調とのギャップに、諧謔が生じる。旅へのとめどない憧れを死生観にまで高めた理想も、しがない独り暮らしの現実も、どっちもまぎれもない「予」の姿として開陳する「場」がそこにある。理想と現実のはさまの諧謔、それが、「草の戸」の句の「主体的条件」であった。

「草の戸」と「雛の家」の照応は、光景どっしりのコントラストである。「草の戸」と「雛の家」の

対比をおのずから意味づける「住替る代ぞ」の規定的作用によって、それぞれのシーンを思い浮かべ、比べ合わせるだけでも、ひとまず一種の感興は獲得される。しかし、それは最表層の取合せであり、句の本意の包み紙に過ぎない。

「予」は、「その句の正しい享受のために」、「前書きに指示された「場」を理解することを要求する。「予」があえて「住る方は人に譲りて」と語るにとどめ、住み手の情報を前文で明かさなかったのは、「雛の家」の暗示を読み解く楽しみを句に設定しているからにはかならない。「雛」の一語は、住み手の唯一の絶対条件が「女の子」であるということを指し示す。「雛の家」の呼称は、その「女の子」を次の住み手の代表的存在と定めた「予」の主観の反映であり、「草の戸」の住み手である「予」と「雛の家」の住み手である女の子の「二物の照応」を秘匿している。理想と現実のはさまの諧謔をほらみつつ、「旅に死せる」ことも辞さぬ覚悟で住まいを手放す「予」。小さな雛人形と雛道具を手に、小さな世界の小さなあるじとして、その瞬間の自らの生に没頭する「女の子」。「破れた（も）引、傷んだ（笠の緒）、（三里に灸）をすえよつと刺き出しにした「瘦骨の」向うずねのむきくるしさと、愛らしい衣装を身にまとい、「こまごま」とした遊び道具に囲まれた女の子のかわいらしさとという取合せの「非連続の飛躍」は、おかしみを誘う。諧謔の中にある「予」は、自らの身に起きた変化を契機に、さらなる諧謔を発見する。隠者と少女という、およそかけ離れた存在の照応を、ひとつの建物が軸となつてつなぐ。動きようのない建物ですら変容を免れない、その本意を詠嘆に終わらせず、主観を脱却し、俳諧へと至る「予」の境地の深まりは、新たな旅への機運を象徴するものでもあった。

### 4. 【も】から【ぞ】へ —— 散文と韻文の融合

#### 【も】のトリフレイ

『おくのほそ道』において、「予」は、散文と韻文による異なる表現形式を混在させる手法を採用。発句の前書きが「前書きなしには誤解を招くか、あるいは不十分な享受に終わることへの虞れを作者が感じ」とときに限って付されるものとして、発句に対する従属性を具有するのに対し、『おくのほそ道』の散文部分は、配置された発句に対する「場」としての機能を持つもの、それ自体が語りとしての必然性のもとに自立することを前提としている。『おくのほそ道』の語りの中で、散文と韻文は、互いに補充しあう対等な関係であるといえる。それは、『おくのほそ道』の虚構世界の産物すべてが「予」の語りのコントロール下にあるというシステムに由来し、散文で語るのか、韻文として詠うのかは、「予」が、語りの局面に応じて、世界の表象にふさわしい表現形式を選び、使い分けた結果として生じる。「予」は、散文と韻文の表現効果を駆使する手法によって、自らの本意が聴き手に正確に伝わることを希求する。

「草の戸も住替る代ぞ雛の家」の句に先立つ散文部分において、係助詞「も」による類例の提示が行われる。『日本国語大辞典』によれば、『おくのほそ道』の冒頭の散文部分における係助詞

その用法は、以下に該当する。

〔二〕文中用法の〔一〕文中の種々の連用語を受ける。のうち、〔一〕同類のものが他にあることを前提として包括的に主題を提示する。従って多くの場合、類例が暗示されたり、同類暗示のものと一例が提示されたりする。類例が明示されれば並列となる。

「行きがふ年も」、「古人も」、「予も」は、モによって類例を明示しつつ、「月日」、「船の上」に生涯をうかぐもの、「馬の口とらへて老をむかふるもの」を「同類暗示」、「旅人」としての属性という主題を包括的に提示している。発句「草の戸も住替る代ぞ雛の家」の「草の戸」は、係助詞「も」の働きにより、散文部分の6つの類例に連なる類例として明示されていると捉えることができる。散文部分の6例は、生物、無生物の別こそあれ、いずれも可動性を具える点で一致する。それに対して、建物である「草の戸」は、自らの意志では移動できない。「旅人」としての属性においては、散文の6例と韻文の1例は同質とは認められない。しかし、「旅人」に原理的に内在する「変容」という位相においては、「草の戸」も同列に居並ぶことになる。旅をする、という能動性も可動性もない建物でさえも、変容を迎えるときが訪れるというこの句の本意は、散文から韻文へと軽やかに駆けぬける係助詞「も」の力によって重層性を増し、「変容」の発見をせむとも聴き手に伝えたいという語り手の熱意が、係助詞「も」を招き寄せる。

### 〔七〕の共鳴

『日本国語大辞典』によれば、「草の戸も住替る代ぞ雛の家」の句における係助詞「も」の用法は、「〔一〕〔二〕文中用法」の〔一〕体言活用語の連体形、副助詞などを受けて、指定的に強調し、聞き手に働きかける。〔二〕に該当する。〔予〕は「草の戸も住替る代」という自らの知覚による強い働きかけは、「草の戸も」の句ののち、最末尾の発句「蛤のふたみに別行秋ぞ」に用いられるが、『おくのほそ道』中の発句全50句中、この使用はこの2句のみである。

「草の戸も住替る代ぞ雛の家」の句において「予」が強調しようとしたのは、「住替る代」、すなわち、変容のタイミングそのものである。「草の戸も住替る代」の知覚の獲得が「雛の家」の実見に基づかないことは、「も」のリフレインの影響下にこの知覚が生まれた経緯から推定される。住み手が交替する時節が訪れたことにより、建物に求められる価値が転換し、建物の様子も変わってゆくだろう、という予測のもとに、「雛の家」は具体的な変容の姿における最有力候補として挙げられる。「雛の家」が想像裡にとどまる存在である以上、「草の戸も住替る代」の発見は、「雛の家」の実見を契機に遡及するものではなく、訪れたのは「代」のみであり、「予」が「面八句を庵の柱に懸置いたとき」、「草の戸」にはまだ何ら変化は起きていない。ゾが強調するのは、今まさに、これから変わろうとしている、その変わりめ、変容がもたらす変化と変化のあわい、マウリツ・エッシャーが版画作品「昼と夜」に描くころの、畑でも鳥でもない何ものである。

奇しくも、語り手が、『おくのほそ道』の最後に発する言葉は、ゾであった。このゾが強調する「行秋」もまた、秋でありながら、秋ではなくなろうとしている変わりめを示唆している。メタモルフォーゼという『おくのほそ道』の虚構世界を貫く命題を、ゾの働きによって聴き手に高らかに宣言した「予」は、旅立ちの初めの句「行春や鳥啼魚の目八涙」において、春の変わりめを詠じ、「蛤のふたみに別行秋ぞ」の句によって語りを終える。「行春」と「行秋」の照応は、春秋の取合せという最表層の対概念にとどまらず、その深部に、ものみなすべて変するメタモルフォーゼの機構を抱えている。

### ユク春とユク秋の照応

「行春ぞ」の句と「行秋ぞ」の句は、散文部分による「場」においても、類似性によって照応している。

「予」の旅立ちを人々が見送る。「行春や」の句では「むつまじきかぎりは宵よりつどひて、舟に乗りて送る」。「行秋ぞ」の句では、「予」の大垣への到着に合わせて、途中、体調不良のため知人の元に身を寄せていた「曾良も伊勢より来り合」、「予」の滞在先である「女行が家」に入集る。その他にも「したしき人々日夜とぶらひて」という様子は、「むつまじきかぎりは宵よりつどひて」と呼応する。「予」はどちらの交通手段にも舟を用いる。大垣から舟で伊勢へと向かう「予」が、「又ふねに乗て」と語るのは、人々が「舟に乗りて送った初めの旅立ちの光景を踏まえてのことである。弥生も末の七日」と「長月六日になれば」によって、どちらも旅立ちの月と日を明示する。

別れを惜しむ見送りの人々と、舟に乗って旅に出る「予」の姿は、シチュエーションまるごとリフレインであり、冒頭の旅立ちの初めと末尾の新たな旅立ちに似通ったシーンを配することにより、聴き手の既視感を誘う。5ヶ月あまりの長旅の末に、ようやく辿り着いた大垣で、「予」は「旅のものうきもいまだやまきるに、長月六日になれば、伊勢の辻宮おがまん」と、また新たな旅に出る決意をする。「予」の語りにも長らく耳を傾けてきた聴き手にとっては、驚きを禁じえない展開であろう。この「ナジャヴ」を前にして、『おくのほそ道』が、とある旅の初めから終わりまでの記録ではなく、「つれの年よりか、片雲の風にきこはれて、漂泊のおもひやまず、海浜にたすらすら」していた「予」の、「日と旅にして旅を栖とす」る生涯の一端を切り取って示したものであることに、聴き手は思い至る。近景としては大垣での再会と別れを、遠景としては『おくのほそ道』の冒頭からのすべてを「場」として、「蛤のふたみに別行秋ぞ」は、聴き手に強く働きかける。

「草の戸も住替る代ぞ」において提示したメタモルフォーゼの定義は、長い旅を終えた今、さらに輝きを増す。蛤の蓋は常に固く閉じ、強い力がかからない限り開くことはない。その蛤が蓋と身に分かれてしまうような変容が起こらうとする、その変わりめが、行く秋という季節の変わりめにちょうど重なる。「ふたみに別行」の「ふたみ」は、「予」が目指す伊勢の二見浦と

の掛詞であり、「蛤が蓋と身に分かれゆく」と「見送る人々と別れゆく」の両義を持たせつつ、「別行」のユクは「行秋」のユクとの掛詞となる。「行秋」のユクは『日本国語大辞典』の語義によれば、「一」(1)「あるところを通過して進む」のうち、「(二)年月が過ぎ去る。また、年をとる。ある年齢に達する」に該当し、「別行」のユクは「(二)の補助動詞として用いる。動詞の連用形、または、それに助詞「て」を添えた形に付いて、動作・状態の継続、進行を表わす」に該当する。ユク秋も、別れユクも、動作が進行中であること、すなわち、変容の大きな表わすためにあつたのだ。

ユク秋は、『おくのほそ道』の旅の「矢立の初」でもある「行春や鳥啼魚の目八涙」のユク春と照応するが、この語を承けるのはヤであつてソではない。「鳥啼魚の目八涙」の発想は、「予」のその「場」の実見を契機とするものと考えられるだろう。「明ほの空靡」としてこの出立のタイミングは、鳥が最もさかんに鳴きしきる早朝の時間帯と一致する。現実世界の元禄2年3月27日は、グレゴリオ暦に換算すると1689年5月16日にあたる。「予」の虚構世界の「弥生も末の七日」が、現実世界と類似した環境にあつたのならば、「予」が旅立った夜明けごろ、留鳥に繁殖期を迎えた夏鳥たちも加わり、より多くの鳥たちがさえずっていた可能性が考えられる。「前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそぐ」という「場」が、「明ほの空に響く鳥の声に悲哀を仮託し、魚が涙を流す」という発想を生じせしめる。鳥や魚に悲嘆を表現させたのは、「予」の「美意識による選択や変質がなされ」て高められた「詩的リアリティー」である。「われわれがその作品に詩的リアリティーを強く感ずるといふのは、対象が精緻的確に描き出されているからではなく、対象によって触発された作者の情動の世界が感性的契機によって意識化され、知的な操作をへて、ある純粹な生命感を響かせてくるためである。」と栗山理一が述べるとおり、ユク春の変容のさなかのありさまを、旅立ちの不安や別れの悲しみに焦点化し、鳥と魚の点景に換えて詠じる「場」において、ヤの詠嘆の働きが、「行春」のアトモスフィアを確かに捉えている。

### 散文と韻文の融合

「草の戸も住替る代ぞ雛の家」の句と「蛤のふたみに別行秋」の句は、散文の中の位置づけにおいても、韻文全50句においても、冒頭と末尾、最初と最後の配列として照応し、ともにメタモルフオーゼという『おくのほそ道』を貫くテーマを、聴き手に強く語りかける態度として一致する。「変容を主題とするにあたり、「予」は、自らの「いつれの年よりか」の旅への憧れを、前提としてまず語る必要があつた。『おくのほそ道』が、出立の日からではなく、旅の動機と決意について語るところから始まるのは、「予」が、変わり続け、移ろい続ける万物の一存在としての自己像を、聴き手に伝える必然性を感じていた証左であろう。(この句に対して、出立の日の「行春や鳥啼魚の目八涙」の句が挿し挟まれ、「草の戸も」の句と「行秋」の句の主題照応の大きな枠組みの中で、旅の初めの「行春や」の句と新たな旅の始まりの「行秋」の句の対

比は、「場」をともなった一対として、『おくのほそ道』の物語の時空を鮮やかに結び合わせる。「春と秋」という安定感のある組み合わせを基本的なデザインコンセプトとして、「鳥」、「魚」、「蛤」という自然の生き物をアクセントに添える。いずれも、身近なモチーフとして古くから文様化されてきた存在であり、聴き手はそれらの形象をたやすく思い浮かべる。しかし、最表層に、象徴化になじみのある「春」と「秋」、「鳥」、「魚」、「蛤」のイメージを並べ、聴き手の受容を円滑にしつつも、ユク春、ユク秋が響かせる「草の戸も住替る代」のソによって放たれたメタモルフオーゼの概念は、移ろいが引き起こす不安定さを基調として湛えている。

散文が韻文を支え、韻文が散文を結晶化する。散文と韻文とが纏りあわされて綾をなし、韻文と韻文もまた、遠く響きあう。並べられた言葉が紡ぎだす意味や光景の基底で、一音一語のモヤソが、散文と韻文を糸のようにつなぎ、『おくのほそ道』という語りを織りなす。「草の戸も住替る代ぞ雛の家」の句を初めとして、「蛤のふたみに別行秋」の最後の一語に至るまで、メタモルフオーゼのテーマを胸に、聴き手に強く働きかけようとする語り手としての「予」の姿を、ソは映し出していた。

### おわりに

こゝには方法をとして建築史を研究する、といえは、やや唐突の感がある。建築とは、まず、物的な存在として扱えられるのが普通のことだから。

しかし、こゝには、あらゆる文化の根底に存し、これを根本的に規定している。そしてこゝの中には、いまは見失われている過去が、そこ深く埋没しており、発掘を待っているのである。

木村徳国 「鏡の画とイハ―建築にかかわることばから」

『古事記』や『日本書記』万葉集『風土記』等八世紀の文献から、さまざまに用例を収集し、「古代の日本語」をたよりに、日本建築の誕生をさぐって、「きた木村徳国は、これらの用例に見られる「建築的なことば」と思想とによって」(1)「きた木村徳国は、これらとしてみせた。木村が上代語からその文化の根底をさぐり、発掘した上代語のイハと、イホ・カリホ・イホリの建築的イメージ」(2)は、遠く「予」の世界まで伝播している。

言葉のみによって構築された世界に触れるには、言葉を読むことによるよりほかない。語るために選ばれた言葉のひびひびと what とするならば、what の語義を丹念に汲み取り、次に、それらの what を組み合わせた how の諸相について考察して、how の働きが創出した価値について考察するところまでが、(3)「読む」の射程となる。what と how の往還を幾度となく繰り返した後に、ようやく、語り手の声が聞えてくる。ひたむきに言葉をたずねた木村徳国は、確かに、上代人と対話しえたのであつた。



- ① 中学校・高校の現行教科書のうち、『おくのほそ道』のテキストを部分的に教材化している教科書は、中学校4種中4種、高校言語文化17種中16種、高校古典探究(古文教材を含むもの)14種中1種である。そのうち(草の戸も)の句を含む冒頭部分(白田は)懸置(の)テキストは、中学校4種中4種、高校言語文化17種中3種(白田は)見送る(る)る(は)は高校言語文化17種中11種を占める。次いで教材数が多い平泉の夢の跡までの部分が中学校の光室までの部分が中学校4種中3種、高校言語文化17種中12種。また、(三代の)夢の跡までの部分が中学校1種(三代の)白毛(の)はまでもその部分が高専言語文化の1種であり、その他、(立石寺)(山形領に)蝉の声の場面のテキストは、中学校4種中2種、高校言語文化17種中5種である。高校言語文化のみのテキストは、「大垣」「露通も」行秋(の)場面に17種中3種、「白河の関」(心も)ひさき(讀書哉)曾良(の)場面が2種、「黒羽」(那須の黒は)ね(馬を)返(し)ぬ(及)び(種)の浜(二十六日)寺に(残)す(の)場面が1種であり、高校「古典探究」のみのテキストは、最上川(取上川は)みちのくより出てく(み)だれを(あ)つて(早)し取上川(の)場面が14種1種である。
- ② 「見(ひ)けるが(ア)クティフ(ア)ー(ア)ント」を生みだす(説)む(こ)の(学)習(活)動「おくのほそ道」冒頭部分の授業構想」仁野平智朗「熊本公立教育学部紀要」第72号「2020年12月18日」p.346-350
- ③ 『新編日本土風文全集71 松尾芭蕉集』が底本とする『おくのほそ道』冒頭の全文中、語り手の自称は、「予」が5例(予も)う(れ)の(年)より(か)「予が(薪)水(の)芽(を)たす(く)」「予は(口)を(と)どて(く)」「予も(又)予(を)尋(ぬ)」「予が(1例)「我も秋風(を)聴(て)」「我々(が)る(る)例(我々)が(先)に(立)ちて(行)く(我々)に(む)かひて」「我々(ハ)所(々)に(て)である(と)から、本稿における語り手の呼称は「予」「統」にする。なお、全文を通して「予」の氏名を示す情報は見られない。
- ④ 本稿における「おくのほそ道」の本文は、『新編日本古典文学全集71 松尾芭蕉集』(井本農)・「久富碧雄」村松友次堀切実 校注訳 小学館 1997年9月20日)所収の「おくのほそ道」p.72〜144を出版とする。ただし「庵」の語の読みがなについては「あ」か「い」はりに変更する。
- ⑤ 栗山理一「芭蕉の芸術観」永田書房 1988年6月30日 p.164-190  
「う(づ)も(で)な(く)」「予」の作品は「予」の場合でも、ある特定の条件のもとに作られるものである。それを作品の生み出される「場」(う(づ)も(で)な(く))と考えることもできよう。そういう「場」を抜きにして作品を鑑賞するとはあつても、もし、そういう「場」を完全(に)超(越)して、あるいは捨象(した)ところ(に)作品が生み出されると考えれば、それは単なる幻想(を)す(ま)す(ら)ぬ(。)(予)の「場」は(ひ)び(き)ま(す)」「予」に分けて考えられる。「予」は、作者のその時ににおける主體的条件であり、も(と)しては(予)のその時ににおける客體的条件である。したがって、「これらの「場」はその時ににおける歴史の場」として、扱(う)ら(れ)る(べ)い。」
- ⑥ なお、煩雑(を)避(け)る(た)め、本稿において、回書の出典掲示は引用の初回に限り、回書よりすでに引用した箇所を再掲(の)場(合)に(は)注記(を)省(く)る(と)す(ら)ぬ(。)
- ⑦ 栗山理一「前掲書」p.165
- ⑧ 栗山理一「前掲書」p.165
- ⑨ 本稿における『日本国語大辞典』の引用は、すべてオンラインデータベースであるジャパンナレッジ(<https://jpankwledge.com/>)収録の『日本国語大辞典 第三版(全13巻)』(日本国語大辞典第二版編集委員会) 小学館語彙辞典編集部 小学館 書籍取次JTBパブリッシング 2000年12月20日・2000年1月20日)デジタル版に拠る。なお、煩雑(を)避(け)る(た)め、以後、同辞書からの引用については、出典の注記を省(く)る(と)す(ら)ぬ(。)

- ① 栗山理一「前掲書」p.165
- ② 栗山理一「前掲書」p.206-207
- ③ 栗山理一「前掲書」p.240
- ④ 「取(り)物(を)曲(の)内(に)外(に)求(め)る(と)い(う)こ(と)は、とりもな(お)せ(ず)そ(の)照(心)を(情)習(や)並(に)よ(る)こ(と)な(く)、個(性)的(な)発(見)を(重)視(し)ま(う)と(す)る(意)図(に)外(ら)な(ら)ぬ(。)」
- ⑤ 栗山理一「前掲書」p.240-241
- ⑥ 和暦からタレ(リ)オ(暦)へ(の)変(換)は、国立天文台(リ)オ(サイトの)「日本(の)暦(目)デ(タ)ー(バ)ース」(<https://eoc.nrt.nao.ac.jp/cgi-bin/koyomi/caldb.cgi>)に拠る。
- ⑦ 栗山理一「前掲書」p.270
- ⑧ 「つまり生活体験の表情がそのまま詩的体験における表情となるのではない」ということである。前者の表情が詩的(形)象(を)獲(得)す(る)ま(で)に(は)作(者)の(美)意(識)「予」の(情)景(が)変(質)が(な)さ(れ)る(と)な(つ)て、後(者)の(表)情(詩)的(リ)ア(ティ)ー(に)ま(て)高(め)ら(れ)る(。)」
- ⑨ 栗山理一「前掲書」p.247
- ⑩ 木村徳国「鏡の面(イ)ハ」建築にかかわることばから」『日本古代文化の探求家』社会思想社 1975年3月20日 p.222
- ⑪ 木村徳国「前掲書」p.222
- ⑫ 木村徳国「前掲書」p.222
- ⑬ 木村徳国「前掲書」p.222
- ⑭ 木村徳国「前掲書」p.222
- ⑮ 木村徳国「前掲書」p.222

- ⑯ 木村徳国は、上記論文のほか、「近代建築のイメージ」『日本放送出版協会 1979年4月1日』の第Ⅱ部「イハとヤハ」と「近代住宅観の一断面」において、「第一章 イハ語非建造物説」第二章 記紀におけるイハの建築的イメージ」第三章 歌語としてのイハ」で、上代語への研究成果の一端を発表している。日本における古代住宅史の研究(木村)は、「上代人の気持や生活を知るほどに唯一の手がかり(同書 p.265)」として、日本国語学大系本の「古事記」『日本書記』、『万葉集』、『風土記』中の建築関連語の用例の精査に専心した。
- ⑰ その結果、木村は、「通俗の国語辞典はいうまでもなく、上代語の辞書の場合でも」住むためにつくられた建造物とするのが「近頃まで」一般的であった(同書 p.173-174)というイハの語義を疑問視し、「イハ語非建造物説を唱えたそれは、「二、同じ家筋や家柄(屋敷)の人の側面から発した言葉で、「三、これが、主に「住まう」に用いられる建築的なものに転化した場合(イハ)も、上代語では住むための建造物ではなかった。」(同書 p.173)。もしくは、「上代語イハは、住居のためのものでもなく、建造物を限定的に意味していたのではな。むしろ、家族が集まり住まう場所であり、敷地と建物をふくめた建築的(な)すまい全体を意味(し)指(示)したものであつて、イメージとしては今日という屋敷全体としてとらえられるべきであらう。」(同書 p.176)という見解であった。
- ⑱ また、木村は、「七八世紀におけるイハ」カリホ」イホリ」『日本建築学会論文報告書』248巻 1976年10月30日 p.19-26)において、「万葉集におけるイホの用例の大半がカリイホ」の短縮形であるカリホである」という調査結果を発表し、「粗末(貧弱)仮設性」(同論文 p.125)というイハのイメージを浮かび上がらせても、「予」のカリホの中で、万葉集における建築を教育・風流との結びつきをみいだし、「これを、わが国建築史住宅文化におけるかかる思想的潮流の源流として把(と)ら(ぬ)同(論)文 p.124)と予(の)建(筑)を(示)して(る)。」